

仲宗根政善先生と矢内原忠雄先生の出会い

IMAIZUMI, Yumiko / 今泉, 裕美子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

118

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002631>

仲宗根政善先生と矢内原忠雄先生の出会い

今泉 裕美子

私が仲宗根先生をより近くに考えその思想に深く触れたいと思った大きなきっかけは、一冊の写真帳に出会ったことにあった。黒い漆塗りに螺鈿で沖繩の地図を細工した表紙、その裏側には「御来島記念 沖繩教職委員会」と記されている。矢内原忠雄先生について取材をするため、御子息の矢内原勝先生宅に伺ったとき、この写真帳を手にする機会に恵まれた[＊]。

矢内原忠雄氏（一八九三—一九六二）は、戦前期は植民地研究、戦後は戦前期の研究を国際経済学として発展させ、また日本の国際関係学の道を開いた経済学者である。氏の植民地研究は国の御用学問としてのそれではなく、日本の植民地政策を帝国主義的、軍事的な性格を持つものとし、その特徴として「同化政策」を指摘してこれを厳しく批判した。こうした言動から東京帝国大学教授の職も追われている。しかし戦後は、東京大学に復職し総長もつとめられた。私の研究に引きつけてみれば、日本における南洋群島統治研究の優れた業績の一つとされる『南洋群島の研究』（岩波書店、一九三五年）を著している。氏はまた、内村鑑三を祖とする無教会キリスト教の信者としてその活動でも知

られている。たとえば『嘉信』という雑誌は、矢内原氏個人が編集発行した伝道雑誌であり、戦後沖縄でも読者を持つものであったが、戦時下で度々の発禁処分を受けながらも発行された「戦いの器」であった²²。

矢内原忠雄氏の沖縄訪問の経緯

一九五七年一月一六日から二〇日にかけて、当時東大総長であった矢内原氏は沖縄教職員会の招きで沖縄を訪れた。第三次沖縄教育研究中央集会²³で講演を行うためであったが、米軍占領下の事情を考慮して琉球大学からの招聘という形をとって各地で講演を行った。講演の順にあげれば、琉球大学、コザ中学、国頭の愛楽園、名護中学、那覇新教キリスト教各教会合同主催の講演会、首里教会などであり、教育のみならずキリスト教に関する講演も行った。七回の講演は何れの会場でも場外にあふれるほどの多くの聴衆を集めたという²⁴。また、移動の機会を利用して視察も行われた。

この講演・視察旅行に同行したのが、当時沖縄教職員会会長であった屋良朝苗氏と琉球大学副学長であった仲宗根政善氏であった。矢内原氏の沖縄への関心は、戦前の植民研究において移民としての沖縄出身者に対して関心を持ったことの延長としてのみならず、沖縄戦の惨禍や軍事占領下の沖縄の実態に触れ、沖縄が抱える問題を見きわめることにあった。

ここにおいて沖縄戦跡の説明役をつとめられたのが仲宗根氏であった。写真帳にはひめゆりの塔、

魂魄の塔、北靈碑、健児の塔にたたずむ仲宗根、矢内原両氏の写真が収められている。矢内原氏が仲宗根氏から沖繩戦の実情を聴く機会を得たこと、また、屋良氏や仲宗根氏と共に各地をめぐり、人々の暮らしや表情に直に接し得たことは、矢内原氏の沖繩に対する見方に微妙に変化を与えていったように思う。また日々沖繩の問題に苦悩し、教育を通じて沖繩の復興を模索しておられた仲宗根氏は、矢内原氏の言動に共感を覚えられ考えを深められたようである。

以下、二人の沖繩での出会いが両者にとってどのようなものであったのかを、矢内原氏の講演や論考、および仲宗根政善日記を通じてみたい。

矢内原氏の主張

矢内原氏の沖繩での講演や、後に著された沖繩に関する評論⁴⁵は、米軍政下という事情を考慮しておこなわれた⁴⁶。しかしその内容に一貫したことは、米軍占領下の沖繩を「軍事植民地」と規定しての米軍政批判であった。そして「軍事植民地」下の諸問題を解決してゆくためには、戦前期日本の国家主義、軍国主義に対する反省のうえに生活の基盤を安定させ、沖繩住民自らが平和主義、民主主義を根づかせてゆくべきであるとし、そのために教育が重要な役割を果たすという自覚を促すべきだとした。生活の安定、平和主義、民主主義の浸透、教育の重要性は、氏が戦後日本の復興のためにも主張した点であったが⁴⁷、沖繩では講演や視察を進めるに従い、沖繩の実情に引きつけつつ、具体的な

解決策を提示しながら論じられていった*8。そこで次に仲宗根氏の思想と接点が見いだされるところに焦点をしばって、矢内原氏の主張をみてみたい。

「悲劇の島」、「矛盾の集積」地としての沖縄

矢内原氏が「悲劇の島」なる表現を強調して用いたのは沖縄滞在四日目、名護中学で行われた「民族の復興と教育」という講演においてである*9。その背景には、矢内原氏が各地を視察しながら、戦争による荒廃と「軍事植民地」化の実態を目の当たりにしたこと、また、その復興について屋良氏から次のような質問が出たことにあったと考えられる。それは「基地経済は福祉的社會をつくり上げることはできぬものであろうか」という問いであった。これに対して矢内原氏は、基地経済といえども産業の転換、人口増加の抑制、土地使用形態の変更など困難な諸条件を満たすことにより、一定程度の安定した社會を形成できると答えた。しかし屋良氏は重ねて「かりに経済的に物質生活上ある種の安定が得られるようになるとしても、精神的な面の希望というか、積極性というか、それはどうでしょうか、それが心配だ。」と尋ねたのである。このやりとりが矢内原氏に、沖縄が「悲劇の島」と言われる所以について、またその復興についてより根深い問題があることをあらためて認識させたように思う。

なぜなら矢内原氏はこのコザ中学での講演にいたるまで、「日本」の復興を語るのと同じ論調で沖

繩の復興を語ってきた。しかし屋良氏から右のような質問が発せられて、矢内原氏は次のように語っている。それは沖繩が「それ自体の住民の歴史があり、相当数の人口もあり、それ自体の経済的、文化的生活を過去数世紀にわたって送ってきた社会」であること、またこのたびの戦争のみならず、薩摩の侵略以来「受身の状態で侵入をこうむ」ってきたことにおいて、「悲劇の島」といわれる内容があり根拠がある、というものであった。そして「屋良先生のお尋ねと御感想を自動車のなかで聞きまして、ゆうべ私はねむれなかった。」とつけ加えている。

民族の復興と教育

つまり矢内原氏は、沖繩が薩摩の侵略以来の長い歴史的な過程の中で「悲劇の島」であり続けたこと、そのことが沖繩住民の精神の復興により切実な問題を提起していることに、初めて言及したのであった。

コザ中学での講演はしたがって、精神的な復興を民族の復興の問題として語るものであった。そこでイスラエル民族の歴史を例に、敗戦、補囚、国土の荒廃などでは民族の生命は終わらず、むしろ「最大の真理」が得られること、そして民族の生命力とは民族の理想、精神であり、教育こそがその生命力を復興させるものであることを強調した。ここにおいて教育が理念とすることは、人間が本来人間として持つ尊さである「人格」を基礎とした平和教育と、民主的な教育であった。特に民主主義に

については、その環境次第で依頼心に傾くか、あるいは反抗心に傾かざるをえない民族が築いてゆくべきものの中での重要な課題であるとした。そしていかに小さい人間、国民であっても、他人の奴隷ではなく、また他人を奴隷にしないという立場から、自分の生きてゆく道を守ることを説いた。矢内原氏は、沖縄住民の意識について、「古い過去」とは別に「現在の意識においては」「日本国民として、日本民族として、日本人としての共通意識」を持つとし、それは日本語による教育が行われていることや、「そのほかいろいろなこと」を考えたうえでの判断であるとした。そしてこの意識を、米軍占領下の「特別な国際環境」のなかでも、「正しい方向」に発達させるべきだとした。この「正しい方向」とは、人間、民族としての意識のほかに「世界市民」としての意識を持ち、世界平和や人類共通の幸福を率先して実現することであり、人間、民族としての生活が、人類の世界的な連帯を導くものであるべきことを主張した*10。

教育理念と社会的実現

矢内原氏は既述のような民族復興にかけるべき理念を掲げながらも、とくに沖縄では、現実との食い違いのなかで諸矛盾や困難に直面せざるをえないであろうことにもあえて言及している*11。すなわち、個々の理想や仕事が現実の情勢を動かすのにどれほどの力になるかと考えれば、勇気も砕ける思いがするだろうし、それが現実だと語っている。したがってむしろ教育が持つ限界、無力を素直に認

めるべきであるとし、その限界を救うものが「哲学つまり真理を考えること」、結局は「正義」が勝つとかたく信じてきたこととした。すなわち矢内原氏は、教育者とはどのような境遇にあらうとも人間としての存在価値を決して捨てず、希望をもって生きねばならないのであり、それがこの世でいかに失敗、敗北と言われようともそのような犠牲の上でのみ人類、民族の進歩があると自覚するよう説いた。この発言は後に述べるように、仲宗根氏が戦時の体験から人は自己の内なる真実によってのみ生きるべきであると悟り、教師にはそれを導く使命があると考えたことと、共振するものであったといえよう。

矢内原氏は講演旅行をしめくくるにあたって、東京と沖縄が「心の近さ」において大変近いという感想を残した。そして、「日本人」が沖縄に関心をもって沖縄の人とともに沖縄の問題を解決すべきであり、また世界平和の問題として沖縄の問題に取り組む必要性を説いた⁴¹²。

仲宗根政善日記から

仲宗根氏は矢内原氏に接して「あれほど柔和な中にあれほどの強さが隠されているかと驚かされた。外面的な力が決して人間の力ではないことをつくづく感じた。」と感想を述べている。そして、ひめゆりの塔に案内された矢内原氏については、「先生は涙をふき深い沈黙の後に可愛そうだなとためいきをつかれた。私は説明申し上げる事をもしばらく遠慮していた。崇高なる精神を持って居られ、敬

度な気持の先生がもらされた気の毒だともらされた御言葉は、私の曾て聞いた言葉の中で一番深い言葉であった。」と記している。

仲宗根氏は、戦時下矢内原氏がその体制批判的な言動ゆえに職を追われ、しかしその後も自らの思想と研究を貫かれたことを知っておられたと思われる。ありふれた「可愛そう、気の毒」という言葉に仲宗根氏がこれほどの印象を持ったのは、矢内原氏の思想に共鳴を覚えていたからではなかったかと推測する。

それは仲宗根氏が、矢内原氏訪問時とは別の時期に書いたと思われる日記につきのように記しているからである。

すなわち、今次の大戦で「民族の一人一人が、生死の境を彷徨して九死に一生を得た」体験を「空にするのは、民族から偉大な文化を生む根を切りとって捨てるようなものである。私一人の体験について言えば」、「光、清水、愛情と平和、生」を得た、ということや、戦時中「羊のように民族全体が戦争へひかれていったことを深く反省させられた。人間には何人も侵しがたい尊厳性のあることを教えられた。自己の中にある真実によって生きる以外に人間の道の無いことに気がついた。」ということである。こうした考えは、矢内原氏が沖縄にイスラエル民族の歴史をなぞらえて沖縄の復興を勇気づけたことや、いかなる困難においても真理を信じ、勇気を持ってこれを追究し続ける毅然たる姿勢を持つべきだと主張したことと通じあうものであったといえよう。

「沖繩人」としての自覚

仲宗根氏のノートには、矢内原氏の講演から引かれたと思われるものとして「世界的なつながりを持つこと、世界性」、「世界の問題を自らの問題として我々はじかに感じて居らない」、「我々ほど平和を求めている者はいない。それにもかゝらず我々ほど平和を実現しようとする組織的に動いていないものはいない。心に平和をもつというその声すらやがてうすらぎつゝあるという卑屈さが我々にはあるのではあるまいか。」、「民主主義の徹底をはかり一人の人間もおろそかにされない…」などのメモが残されている。

これらのメモにみるように仲宗根氏は、矢内原氏の主張、とくに世界の中の沖繩という視点を持つことや、強固な意志の堅持、そして教育の重要性を説く論に共感を覚えながらも、しかし「日本人」を掲げる矢内原氏の主張とは異なる方向で、沖繩における教育のあり方に考えを深められたようである。それは「真の沖繩人になることが真の世界人になることである。」という表現に端的に表されるものであった。

仲宗根氏は、矢内原氏が強調した人格重視の教育に対して賛同を示してか「人間の心をつくること、人格の核を完成すること」と記したうえで「沖繩人が沖繩たることを自覚すること」とつけ加えている。すなわち仲宗根氏の考えた沖繩における人格形成とは、「日本人」としての人格というよりもむ

しろ、「沖繩人」としての人格を形成することであった。仲宗根氏は、戦後の「沖繩人」が「沖繩人」たる自覚を持たないことに教育が取り組むべき最大の課題があるとしている。なぜなら「自己を深く自覚しその自己を力強く生き抜くところに人間の偉大なる精神がはつきされる」のであり、そこに文化が築かれるからであった。

仲宗根氏は言う。琉球松は沖繩の風土の中で「本性そのものを伸張することによってあのような美しさが出て来る」、竹には竹の、百合には百合のといった具合に、それ自身の美しさを発揮するのはその本性を生かすことに他ならない。つまり「我々が新しい文化を築いて行くためには沖繩人が沖繩人であることが何より大切である。沖繩人が沖繩人であるためには自分自身を愛し、自分の郷里を愛することであり、我々が我々のたつているこの足場を強く踏みしめることである。」「何をにおいても我々は偉大なる沖繩人となることが理想である。偉大なる世界人ということは我々にはありえない。」と。すなわち、人間の核となるべきものなくして「世界人」には到底なれるはずはなく、むしろ平和主義や民主主義を学びとりつつ、「沖繩人」たるべきことが、おのずと「世界人」になることではないか、というのである。これは、仲宗根氏が軍国主義、国家主義的な教育の担い手となったことへの深い反省にもとづくゆえの主張であったし、「沖繩人」から「世界人」への視点は、矢内原氏のいう「世界市民」としての「民族」たるべきという主張と反するものではなかった。

矢内原氏と仲宗根氏が、その後どのような接触をもったのかについては情報を持たない。しかし、

両氏の出会いがたとえ一度きりのものであっても、二人が出会い、そこに発せられ記された言葉には、その後の両氏の言動や思想に貫かれていったものを見いだすことができる。その貫かれたものとは、もちろん、二人の出会い以前からそれぞれがもち続けていたものでもある。しかし、全く異なった境遇、体験を持つ両氏に橋がかかったことにあえて注目するのは、二人が戦前、戦時の自らの経験を見据え、その上にたって戦後の問題に取り組みだすからである。そして両氏が出会われた当時に主張されたこととは、いまだ現代の問題でありつづけているからである。二人は身のまわりのたとえ些細な矛盾であろうとも、そこに潜む大きな力、問題性をみきわめる力をもつこと、たとえ無力であろうとも信念をもって行動してゆくこと、を示し続けられた。

敗戦後五〇年の夏が終わった今、「羊のように引かれる」危機感の薄れた現在、自らの拠って立つところを愛し、愛するがゆえに、歴史（体験）に学び、主体的に考え、意志を示さねばならないこと、このことを研究者として、教育者として貫かれた仲宗根先生の言動に、あらためて学びたいという思いを深めている。

本稿執筆にあたり、仲宗根泰昭先生、矢内原勝先生のご厚意を受けました。ありがとうございました。

- * 1 この写真帳は現在、琉球大学附属図書館に所蔵されている。
- * 2 矢内原忠雄「私の伝道生涯」『橄欖』一七号、一九五五年十二月（矢内原忠雄全集」第二六卷、岩波書店、一九六五年）。
- * 3 第三次沖繩教育研究中央集会のテーマは、基礎学力を育てるための学習指導、民主的社會人を育成するための道德教育であった（『沖繩タイムス』一九五七年一月十五日付夕刊）。
- * 4 たとえばコザ中学では、定刻一時間前から教職員、中高生ら数千人がつめかけ、四教室を一つにした会場は満員となり、場外にあふれた聴衆は寒さに震えながらスピーカーを通じて講演に聴き入ったという（『沖繩タイムス』一九五七年一月十九日付朝刊）。こうした各地の講演風景は、本稿冒頭で紹介した写真帳にも収められている。
- * 5 本稿で扱う矢内原氏の講演及び評論は、特別の断りがない限り矢内原忠雄「主張と随想」東京大学出版会、一九五七年（『矢内原忠雄全集』第三卷、岩波書店、一九六五年）に収められている。
- * 6 戦前、朝鮮で講演した際、統治問題に言及したために、氏を招いた朝鮮人の友人が憲兵から体刑を受けた。矢内原氏は沖繩でそういうような問題が起きないように配慮したという（新崎盛敏「矢内原先生と沖繩」南原繁ほか編「矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—」岩波書店、一九六八年）。また矢内原氏は、米国民政官が氏との面会を避けたこと、琉球大学での講演では同大学の米国人教授が一人も顔を見せなかったことを記している（矢内原忠雄「沖繩旅行」「人生と自然」東京大学出版会、一九六〇年）。
- * 7 矢内原忠雄「年頭の辞 他七十五編（時論一九五二年—一九六一年）」『矢内原忠雄全集』第二十卷、岩波書店、一九六四年。
- * 8 ①土地所有農民を保護すること、②基地に依存する經濟の「外見的繁榮に眩惑」されずに、その対策を考えること、例えば計画的な人口増加、農民向けの宅地・耕地の保護、海外移民施策の立案をあげている。そして以上のような政策の基礎となるものとして、自主的で自由な教育が行われることの重要性を強調した（矢内原忠雄「現地にみる沖繩の諸問題」『朝日

新聞』一九五七年一月二八日)。また琉球大学の学生に対しては、沖縄の問題は国際関係の諸矛盾を反映したものであり、したがって「世界の中における沖縄」の視点をもって学ぶべきだとし、沖縄の問題解決が世界人類の幸福と平和につながることも説いている(一月十六日、琉球大学における講演、「世界・沖縄・琉球大学」として所収)。

*9 一月十九日、名護中学校における講演(「民族の復興と教育」として所収)。

*10 一月十七日、那覇市における沖縄第三次教育研究中央集会にての講演(「教育の基本問題」として所収)および、前掲「朝日新聞」記事。

*11 前掲「教育の基本問題」。

*12 一月十九日、那覇商業高等学校における講演(「世界の平和と人の救」として所収)および、「勇気と希望をもて、矢内原総長別れのメッセージ」(「沖縄タイムス」一九五七年一月二一日付朝刊)。